

Dr. Shigehiro Oishi

University of Virginia

Dr. Oishi is a professor of psychology at the University of Virginia. He received his PhD in Personality and Social Psychology from the University of Illinois at Urbana-Champaign in 2000, and B. A. in Psychology from International Christian University. He is a world-leading authority in culture and well-being studies. He has written more than 150 articles and chapters, and that leads him to be one of the most cited social-personality psychologists. Most recently, he is selected as the 2017 Society of Experimental Social Psychology Career Trajectory Award recipient, for his uniquely creative and influential scholarly productivity.



Title of the lecture:

The Art and Science of Subjective Well-being

The empirical science of subjective well-being, popularly referred to as happiness, has grown enormously in the last decade. In this lecture I will summarize key empirical findings on subjective well-being such as income, social relationships, genetics, and culture. I will also discuss policy implications of the empirical findings, asking questions such as “what is a happy society?” Finally, I will explore fundamental philosophical questions that emerged out of novels, movies, and obituaries such as “What is happiness?” “What is a happy life?” “How is it different from a meaningful life?” and finally “Is a happy and meaningful life everything?”

Moderator :

Asuka Komiya (Hiroshima University)

*本講演は、日本語で行われます。常任理事会との共同開催により、2017年度日本社会心理学会公開シンポジウムとしても開催されます。

意志動力学の創成と推進-意志力を科学する-

共催：新学術研究領域 意志動力学の創成と推進

企画者： 第58回日本社会心理学会大会準備委員会

話題提供者： 櫻井 武 (筑波大学・非会員)

大石直也 (京都大学・非会員)

指定討論者： 唐沢かおり (東京大学)

概要

意志(ウィル=will)は合目的な行動をドライブするものであり、その強さは意志力(ウィルパワー)という概念であらわせる。ウィルは報酬系に牽引され、大脳辺縁系に由来する不安や恐怖によって妨げられるだけではなく、目先の障害を乗り越え長期の目標を達成するための力でもある。本領域ではこうした意志力のメカニズムと影響をあたえる要因を多角的に科学する。今回、日本社会心理学会のシンポジウムには2名の計画研究代表者が発表し、本学会の参加者と意志動力学について議論したい。

櫻井 武 氏 <覚醒と行動の神経科学>

意志力(ウィルパワー)は報酬系・覚醒系や前頭前野、大脳辺縁系、基底核などさまざまな脳部位が関与して成立すると考えられる。本シンポジウムでは覚醒系のコンポーネントであるオレキシンがどのようなメカニズムで覚醒や行動を制御し、大脳辺縁系の機能に関わるか、私たちのデータを示しながら概説する。

大石直也 氏 <モチベーションの脳機能イメージング>

MRIに代表される脳機能イメージング技術は、近年その発展が著しく、ヒト脳内の領域間の結合状態を網羅的に解析できるようになり、複雑な機序が示唆されるヒトの意志力の神経基盤解明にも寄与できると考えられる。このような最新の脳機能イメージング技術について、具体的な研究データを示しながら概説する。

多様な〈個性〉を創発する分子・神経・社会基盤の統合的理解を目指して-複合領域研究の推進-

共催：新学術研究領域 多様な「個性」を創発する脳システムの統合的理解

企画者： 日本社会心理学会第58回大会準備委員会

話題提供者： 保前文高 (首都大学東京・非会員)

郷 康広 (自然科学研究機構新分野創成センター・非会員)

大隅典子 (東北大学・非会員)

指定討論者： 亀田達也 (東京大学)

概要

平成28年度に発足した新学術領域「多様な〈個性〉を創発する脳システムの統合的理解」では、脳神経系発生発達の多様性や介入によるゆらぎを解明し、集団における「個性」成立の法則やその意義を明らかにし、「個性創発学」とも呼べるような新たな学術領域を切り拓きたいと考えている。今回、日本社会心理学会のシンポジウムには3名の計画研究代表者が人文社会系、生物系、理工系の立場から領域の概要について発表し、本学会の参加者と「個性」の創発されるメカニズムについて議論したい。

「個性」への興味は人間にとって根源的なものである。さまざまな「個性」は、ゲノムの個体差が元になっているが、育ち方や生活習慣等の環境的要因によっても、その現れ方は変化する。これは、環境によって遺伝子の働き方が異なる「エピゲノム」機構が存在するからである。目や髪の色のようにわかりやすい身体的特徴だけでなく、認知的能力やパーソナリティなど、脳神経系の機能に依存した心的機能においても「個性」は認められる。このような心的機能の神経基盤や遺伝的・環境的背景については、未だ十分には明らかにされていない。しかしながら近年、情報科学技術の向上により「ビッグデータ」を扱える時代となり、ヒトの脳画像等のデータや動物の各種行動観察データ、神経活動データ等の膨大なデータを集めて、多変量統計解析やデータ駆動型研究を行うことが可能となった。そこで我々は、今こそが「個性」の研究に取り組む好機と捉え、新学術領域・複合系において本領域を立ち上げることとなった次第である。

本新学術領域研究では、人文社会系、生物系、理工系の研究者が密接に連携することにより、脳神経系発生発達の多様性を解明し、「個性」創発の理解に繋げたいと考えている。言うまでもなく、

「個性」の理解には人間を対象とした研究が必須であるが、それだけでは「個性」がどのように創発するのか、そのメカニズムに迫ることは難しい。ヒトと動物に共通したモデルを立てることにより、ヒトだけを対象にした従来の研究では扱うことが難しかった集団内の不適応や次世代への継承、ヒトに至る進化などの問題に関して、種々の介入等が可能な動物を対象とした研究により取り組むことを可能にすると我々は考える。

これまで、動物を対象とする研究者は心理学等の研究者との接点が少なく、パーソナリティ研究等を十分に理解した上で適したモデルを立てたり解析手法を精緻化させてきたとは言い難い。逆に、生命現象の分子メカニズムの理解が心理学に貢献できると考えていない研究者もいるように感じられる。本新学術領域には、きわめて多様なバックグラウンドを持つ本領域の研究者が参画することを通じて、「個性」についての複合的な研究を推進していきたいと考える。例えば、子どもが言葉を獲得する過程における個人差がどのようにして生じるのかについて、齧歯類や鳴禽の音声コミュニケーションの研究が役に立つかもしれないし、齧歯類や非ヒト霊長類のゲノム情報や、脳におけるその働き方を調べるというアプローチもあるだろう。

本新学術領域はまた、研究期間内に得られたデータに関して、データシェアリングの仕組みを構築する。これにより、将来的に他の研究者にもデータ共有を可能にし、ヴァーチャルな「知の集合体」を形成することによって、国際社会にも大きな貢献を果たすことが期待される。なお、「個性」に関する科学的知見は社会において慎重に取り扱われる必要があるため、「個性」に関わる科学情報の発信・利用に伴う倫理的問題を検討し、市民公開講座等の開催により、社会的合意形成のための機会を提供する。

Self-esteem とは何かを考える

企画者： 敷島千鶴（帝京大学）・大江朋子（帝京大学）

話題提供者： 敷島千鶴（帝京大学）

山口 勸（東京大学）

大江朋子（帝京大学）

新谷 優（法政大学）

概要

Self-esteem は心理学とその関連領域において広範かつ頻繁に用いられてきた概念である。しかし、self-esteem とは一体何か、その正体についての検討は十分に行われていないまま、分析に導入されることが多いように思われる。本ワークショップでは、self-esteem を個人レベルで規定する生物学的基盤、self-esteem を集団レベルで規定する文化的基盤、self-esteem を左右する状況要因、そして self-esteem を高く持つことの意味について、4 名の話題提供者が各自の実証研究を紹介し、self-esteem とは何かを多角的に検討する。

具体的には、敷島が、Rosenberg Scale の縦断データ及び、Big Five パーソナリティデータを双生児から収集し、行動遺伝学分析を行うことにより、個人の self-esteem の安定と変化に寄与する遺伝の影響を、パーソナリティとの関連から明らかにする。

山口氏は、Rosenberg Scale で測定される顕在的 self-esteem データと、Implicit Association Test で測定される潜在的 self-esteem データから、顕在的 self-esteem の変化に寄与する文化の影響と、文化普遍性の高い潜在的 self-esteem の存在を論じる。

大江は、潜在的 self-esteem、指の長さの比 (2D:4D)、及び、環境温度のデータから、潜在的 self-esteem が胎児期のホルモンの影響を受ける可能性があること、また、状況に応じて変動することを示し、個人の self-esteem の安定性と可変性を議論する。

新谷氏は、他者から良い評価を得ようすることで self-esteem は高まるが、他者から良い評価を得ようとした際には様々な弊害が生じることを示すデータを紹介し、無理なく self-esteem を高めていくにはどうあるべきかを議論する。

研究デザインを超えた self-esteem 概念の理解を促す議論の展開を目指す。

文化と注意研究の最前線：注意の文化普遍性と文化依存性

企画者： 増田貴彦（アルバータ大学）・小宮あすか（広島大学）

司会者： 小宮あすか（広島大学）

話題提供者： 増田貴彦（アルバータ大学）
上田祥行（京都大学・非会員）
富永仁志（京都大学）

指定討論者： 有賀敦紀（広島大学・非会員）

概要

「いかに深く文化はヒトの心に影響するか」という問いを背景に、これまで多くの文化比較研究が進められ、注意の制御スタイルが文化によって異なることが示されてきた。知見が蓄積されていく中で、近年、文化は全ての注意機能に一様に影響するのではなく、その影響の範囲や大きさにムラのある可能性が指摘されている。本ワークショップでは、文化心理学および認知心理学の視点から、注意の文化普遍性と文化依存性に関する最新の研究動向について話題提供を行う。さらに、文化がどのように注意の制御スタイルに影響するのか、個人内のプロセスを明らかにする試みについて報告する。文化と注意研究でこれまでわかってきたこととこれからの検討課題を共有するとともに、心と文化の関係を検討する研究の今後の方向性について議論したい。

ヒト, ラット, マウス, カイコによる新・社会心理学

企画者： 中嶋智史（広島修道大学）・須藤竜之介（九州大学）

司会者： 中嶋智史（広島修道大学）

話題提供者： 中嶋智史（広島修道大学）

村田藍子（早稲田大学・日本學術振興会）

請園正敏（国立精神・神経医療研究センター・非会員）

須藤竜之介（九州大学）

指定討論者： 高野裕治（同志社大学・非会員）

概要

従来、社会心理学においては、ヒトを対象とした研究を通じて、社会場面にかんする数多くの理論が生み出されてきた。一方で、近年、生物学、神経科学、行動薬理学などの様々な学問領域において、他の生物種を用いることにより、ヒトの社会性の生物学的基盤について探る試みが始まっている。社会心理学でも、そうした他分野における試みを積極的に取り入れていくことにより、既存の理論の強化や、新たな理論的枠組みの形成が期待できる。また、ラット、マウスなどのげっ歯類はヒトのモデル動物として神経科学、薬理学の分野で多く用いられ、ヒトの生物学的なメカニズムを解明する上で欠かすことができない対象となっていることから、げっ歯類を用いた社会性についての研究の知見を社会心理学に取り入れていくことは、今後、ヒトの社会性の生物学的基盤の解明をしていく上で重要な役割を果たすと考えられる。

本ワークショップでは、まず、ヒトの社会性とラットの社会性の繋がりに関連する話題として、中嶋がヒトおよびラットの表情認知の研究、村田先生が、ヒトおよびラットの共感性の研究について紹介する。次に、請園先生が、マウスを用いた社会的促進の神経メカニズムの研究を紹介する。最後に、須藤先生が家畜化によって生物種としての多くの機能を失ったとされるカイコにおける社会性の研究について紹介する。

いずれの話題提供者も、心理学者としてヒトを対象とした社会心理学的研究を行うと同時に、ラット、マウス、カイコなどの他の生物種を対象として認知科学的、神経科学的手法を用いた研究も行っていることから、他の領域、もしくは他の生物種を対象とした研究の知見とヒトを対象とした社会心理学の知見を融合する上で適した人材であると考えられる。これらの新進気鋭の若手研究者の方々を中心に、他の生物種を対象とした研究が今後の社会心理学の発展にどのように貢献できるか議論したい。

自動運転における責任の問題をめぐって

企画者： 唐沢かおり（東京大学）・戸田山和久（名古屋大学）

司会者： 唐沢かおり（東京大学）

話題提供者： 谷辺哲史（東京大学）
二宮芳樹（名古屋大学・非会員）
小林正啓（花水木法律事務所・非会員）

指定討論者： 戸田山和久（名古屋大学）

概要

責任判断、道徳的判断は、社会心理学者が大きな関心を持つ領域だが、一方で技術の進歩がもたらす諸問題について、迅速に対応して研究を進めることが必ずしも出来ていない。自動運転を含む「心がない存在が意思決定をする」ことから生じる諸問題は、近未来的に、我々が直面することであり、そのことを見据えて、社会心理学も、工学、哲学、法学と連携して研究を展開していく必要がある。ワークショップでは、自動運転車、ロボット、人工知能などに対する人々の責任判断に関する社会心理学的研究、自動運転車開発の現状と、社会実装に向けての課題、自動運転にかかわる法整備の現状と課題に関する話題提供に基づき、これらの問題を学際的に検討する必要とその具体化に向けての方法、さらには今後の取り組みの方向性について議論したい。

集団パフォーマンスの科学の構築へ向けて： 小集団のダイナミックスの展開

企画者： 原田知佳（名城大学）

司会者： 原田知佳（名城大学）

話題提供者： 土屋耕治（南山大学）
藤原健（大阪経済大学）
秋保亮太（九州大学・日本学術振興会）

指定討論者： 亀田達也（東京大学）

概要

集団に心を仮定することは誤りだとするオルポートの主張（Allport, 1924）は、その後の集団研究に方法論の上でも、概念構築の面でも多大な影響を与えてきた。集団心の捉え方、扱い方には多様な議論がある一方、個人の和を超えたダイナミックスを捉えることの必要性、集団の全体的な心理学的特性を可視化するアプローチの重要性が指摘されている（唐沢・戸田山, 2012）。そうした中、Woolleyらの研究グループは、個人の一般知能（g因子）と同様に、集団にも集団の知能を意味する集団的知能（collective intelligence）が存在することを報告し、こうした知見が個人特性、集団のダイナミックス、パフォーマンスを包括する、集団パフォーマンスの科学を構築するための幅を広げると主張する（Woolley, Chabris, Pentland, Hashmi, & Malone, 2010）。

本企画では、方法論的・概念的困難さを抱える集団の特性について、異なる観点から捉えた研究の報告をもとに、集団パフォーマンスの科学の構築へ向けて、特に小集団のダイナミックスの観点から今後どういった課題に注力すべきかを議論したい。土屋は、Woolley et al. (2010)の研究を参考にして実施したメンバーの特性（社会的感受性）と集団パフォーマンスとの関連が、課題の質によって異なること、また、集団的知能の発現プロセスに関する実験結果を報告する。藤原は、ノンバーバルな相互影響過程とパフォーマンスの関連について、シンクロニーに焦点を当てつつ議論する。秋保は、暗黙の協調の実現過程に関する実験結果を報告し、チーム学習と共有メンタルモデルが活動の効率化にどのように機能するかについて議論する。

指定討論の亀田先生には、実験社会科学の文脈からコメントを頂き、今後の研究の射程を描きたい。さらに、フロアとの質疑応答を通して、集団パフォーマンスの科学の構築へ向けた今後の展開に関する論点を精査し、集団研究の今後の展望を持つことを目指す。

防災意識とは何か：社会心理学と地域防災の視点から

企画者： 尾関美喜（東京国際大学）

司会者： 尾関美喜（東京国際大学）

話題提供者： 尾関美喜（東京国際大学）
島崎敢（防災科学技術研究所・非会員）
元吉忠寛（関西大学）
尾崎由佳（東洋大学）
磯打千雅子（香川大学・非会員）

概要

地震、火山の噴火、豪雨といったさまざまな形の大災害が頻発する近年、人々の防災意識を高めることの重要性が政策的にも重視され、数多くの研究がなされてきた。しかし、これらが抱える問題として、「防災意識とは何か」が明確に定義されていないままに話が進んでおり、個々の研究で用いられる尺度についても内容が大きくことなっていることがあげられる。つまり、防災意識が何なのか不明確であるがゆえに、具体的な施策が定まらないばかりか、誰が、何をできるようにしなければよいのか、根本的な問題が解決されていないのが現状である。

こうした問題に対し、尾関からは、「防災意識が高い人の特徴」を通じて防災意識を構成する内容を明らかにするために、先に防災意識の定義を提示したうえで防災の専門家に対して実施したインタビュー調査の結果を報告する。地域の災害レジリエンスの可視化に取り組んでいる島崎と、社会心理学を専門とする元吉からは、それぞれが異なる視点から独自に作成した、防災意識尺度の内容とその妥当性について報告する。

さて、防災は、「いつ来るかはわからないものに対して備える」という側面を持っている。そこで尾崎氏からは、自己制御と時間的展望に関する社会心理学的研究を行ってきた立場から、防災意識というものに対してコメントをいただく予定である。そして、磯打氏からは、工学的アプローチで行政や地域組織の防災事業計画策定に携わり、バーチャルリアリティを用いた防災教育を行ってきた立場から、心理学者の考える防災意識に対してコメントをいただく予定である。

都市在住高齢者の社会的ネットワーク形成を目指した地域介入研究： マルチメソッドによる効果の検証

企画者： 片桐恵子（神戸大学）
話題提供者： 増本康平（神戸大学・非会員）
原田和弘（神戸大学・非会員）
福沢 愛（神戸大学）
指定討論者： 三浦麻子（関西学院大学）
石黒 格（日本女子大学）

概要

高齢者の孤立死や認知症徘徊による行方不明高齢者の増加、高齢独居・高齢夫婦のみ世帯への災害時や緊急時の対応、といった高齢社会のかかえる問題を解決し、高齢者が安心して安全に生活する環境を整えるうえで、住民同士の支え合い・助け合いの基盤となる社会的ネットワークが必要不可欠である。神戸大学大学院人間発達環境学研究科では、2012年から地域住民とともにタウン・ミーティングの開催による地域問題の共有化を経て、地域住民の交流促進を企図した「アカデミック・サロン」を開催している。

このようなアクションリサーチに効果の測定は欠かせないが、アクションリサーチ研究の歴史は浅く、効果の評定方法はいまだ模索段階にある。そこで本ワークショップでは、マルチメソッドによる評価とその効果を紹介し、アクションリサーチの効果を多面的に示すことを目的としている。

【企画者 片桐恵子】 本学研究科で実施しているアクションリサーチ「アカデミック・サロン」の内容などの紹介し、住民の「アカデミック・サロン」への参加の効果を、縦断調査のデータにより示す。

【話題提供者 福沢愛】 Well-being 規定因の一つとして、経済的豊かさや身体的健康といった人的資本が挙げられるが、高齢者の人的資本は、定年退職や身体状況の低下などにより減少する傾向がある。演者らは、社会関係資本の持つ緩衝効果に着目し、社会関係資本が、人的資本の減少による Well-being への脅威を和らげる効果があるかを縦断調査によって検討した。その結果、経済的豊かさの減少や IADL の減少は、Well-being に負の影響があった。しかし、弱い紐帯が多い人は、IADL の減少は生活満足度を低下させず、信頼感が高い人では、経済的豊かさの減少が生きがい感を低下させなかった。つまり、人的資本の減少が Well-being に与える脅威を、社会関係資本が緩和したことが示された。また、IADL が減少した高齢者の間では、弱い紐帯が、Well-being を保つ効果があることが示唆された。

【話題提供者 増本康平】 地域住民の社会的ネットワークを促す取り組みに共通する問題として、客観的な効果検証の困難さを挙げるができる。また、社会的ネットワークの基盤となる高齢者のコミュニケーション行動に影響する要因についても十分に検討されてきたとはいえない。そこで演者は、ウェアラブルセンサを用いて対面交流を定量的・自動的に収集することで、健康教室参加者のネットワークの形成や変化を客観的に評価することを目的とした実験と、高齢者のコミュニケーション行動に影響する要因を探索的に検討するために実施した集団実験について話題提供をおこなう。

【話題提供者 原田和弘】 積極的な社会的交流は、アクティブエイジングの実現に重要と考えられている。しかし、社会的交流の影響には、性差や負の側面もあるだろう。演者らは、高齢者における社会的交流が感情変化に及ぼす影響とその性差について、集団でのウォーキング場面を対象とした検証を行った。その結果、男女とも、ウォーキング中に会話を楽しめた者ほど、高揚感が高まっていた。一方、多くの人と会話することは、女性では良い感情変化（否定的感情の減少）と、男性では悪い感情変化（落ち着き感の減少）と関連していることが明らかとなった。

視線追跡 (eye tracking) 技法利用の可能性： 消費者行動研究を通して考える

企画者： 秋山 学 (神戸学院大学)・池内裕美 (関西大学)

司会者： 秋山 学 (神戸学院大学)

話題提供者： 秋山 学 (神戸学院大学)

池内裕美 (関西大学)

竹村和久 (早稲田大学)

概要

消費者行動研究においては1970年代から視線追跡(eye tracking)を用いて、消費者の意思決定過程を探る研究が行われている(e.g., Russo, 1977)。意思決定過程、特にその認知過程の探求においては、視線追跡以外にもプロトコル法や情報モニタリング法といった手法が用いられてきた(竹村, 2009; Glaholt, & Reingold, 2011)。しかし、こうした手法は、研究方法それ自体が意思決定過程をより熟慮的へ変容させるなど、研究対象とする認知過程それ自体を変容させる可能性も指摘されている。これに対して視線追跡では、測定行為それ自体で当該事象の認知過程を変容することが少ない、あるいは、より日常的な刺激そのものを意思決定(選択)課題として利用できるといった利点がある。従来は高価な機器が必要とされるとともに、その解析にも相当程度の時間を要していたものが、簡便にデータを整理するソフトウェアが入手できるようになるなど、その導入が容易にもなっている。こうした背景に加えて、Gaze cascade 効果(Shimojo et al., 2003)は、顕在化された選好と視線との関係を問い直す好機となり、視線追跡を用いた多くの研究が発表されている。

本ワークショップでは、視線追従だけでなく、プロトコル法や情報モニタリング法も用いた研究で消費者行動研究を牽引して来た竹村先生から視線追従を用いた研究を紹介していただきながら、本手法の特徴や課題、可能性に関して話題提供をお願いする。さらに、消費者の価値判断・意思決定過程を探るための手法として視線追従を用いた研究に着手しはじめた池内・秋山両名のそれぞれの研究紹介、特に、視線追従を利用するメリットや研究遂行上の課題に関する話題提供を行う。池内からは、誘目性の高い広告やパッケージの制作、あるいは売れない商品のパッケージ上の問題点の発見といった、主に産学連携活動で取り組んでいる実務的な課題を解決するために実施した基礎的な研究例を紹介する。秋山からは、近年の視線追跡技法で用いられる測定機器やソフトウェアなどの紹介とともに、行動経済学の代表的な知見の一つとして、また、消費者の商取引時の契約における課題として注目されているデフォルト効果を生み出す意思決定過程を視線追跡を用いて整理する試みを紹介する。視線追跡技法利用の経験豊富なエキスパートの知見と、初心者の研究双方を紹介しながら、消費者心理のみならず、社会心理学における視線追跡技法利用の可能性とその課題を考えてみたい。